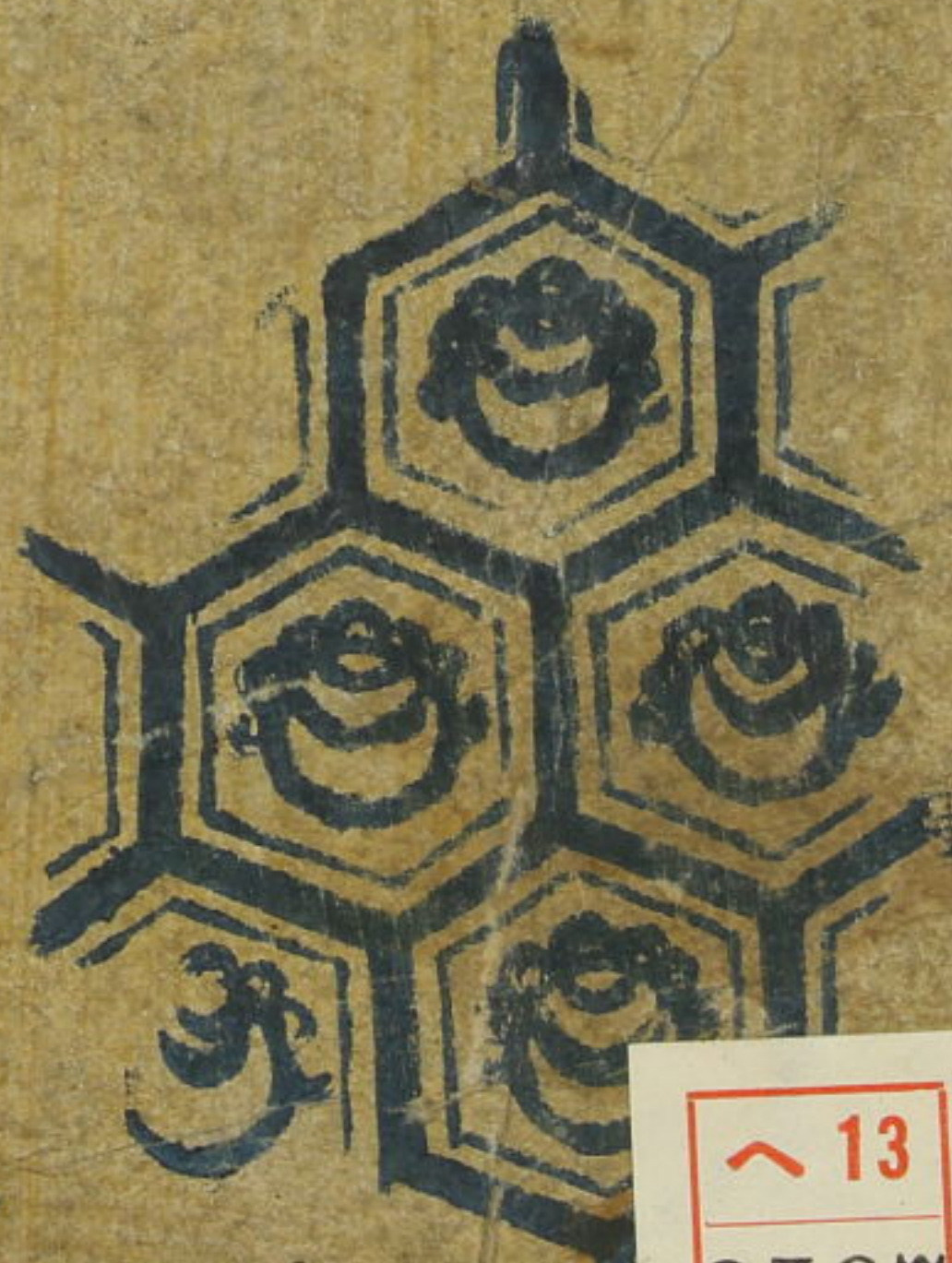




近世說美少年錄

三



~ 13
3567
3



門 13
 3567
 卷 3

近世説書 少年録第一輯卷之三



東都

曲亭主人編次

録異亭の蛇薛子胎は濡る
 千本吟の兎徒命を喪ふ

再説陶瀬十郎貞房の明輩の語説やく阿夏が素生云云と波ゆく
 肚裡の思ふやうに推量小違ひぬとく准を名くは歌妓より遊莫財成
 のと側室壁立女小取事ともかともあふ取交るるをさるる良人あり。子よ
 わふものゝんぬ。虚々とゆく処小あはれ然りとも知らぬかひ路の敷里りく
 福と惹ゆをとりまむ他の馬車無へる人の妻小親むべし只情を割見
 慾を制めく遠離る小優とありと深念する小介后の天孫小雁の翅小寄る
 毫の便りもせざりけり。表語休題末松木偶女の日大津小居送るとひを

早稲田 大學 図書館
 昭和 34.6.3 樊
 藏 書

小夏と看とりし小夏が病著早小愈ひ。その家のあり夫婦もうち散りて
 内茶と与へ昨夕の臥房小臥さあめ。奴婢をやりし小夏は程々立の
 雨之大く降る。その日も果敢る。暮る。木偶の二條。宿所へつる。を
 阿夏がさそ。候やうびんと思ひ。又その夜を明ま。小夏が病著稍瘥。とて
 宿所へつると。起出く。それ天の明。早飯果る。木偶のあり。夫婦奴婢
 小の飲びを述別を告げ。その阿夏が選置る。衣裳之結箱を。を被
 包と背は肩。小夏と先小立。急ぐとまれ。小兒を俱。さる。三里の路果
 敢と。さ。已も。半過。比親子宿所。小夏り。来。絆如此。多。阿夏小報。不
 阿夏の竊。瀬十郎が。社。思。い。も。樹。竹。接。心。答。木偶の
 訝り。情申を。知。わ。詰り。も。回。昨。夜。候。を。恨。ま。け。り。と。入。り。れ
 より。後。の。幾。日。も。阿夏が。生活。暇。あり。疎。疎。ゆ。え。親。も。招。く。花。主。の。多。り。

木偶の又小夏と。四條河原。吹鼓。一。舞。踏。ら。と。僅。ま。の。日。と
 送る。程。小夏の。過。秋。も。や。八。月。中。浣。は。り。け。を。棚。小。物。措。く。高。賈。も。大
 くの。暇。ある。抄。枯。比。の。あ。れ。河。原。人。歩。苗。ら。物。観。る。人。の。稀。ま。り。と。ら
 木偶。小夏の。錢。を。取。り。む。る。く。帰。日。の。目。も。舞。の。衣。裳。と。曲。る。と。ら
 薪。炊。の。代。と。さ。の。の。阿夏の。を。憂。と。せ。只。瀬。十。郎。の。牡。鹿。角。の
 束。の。間。も。忘。れ。が。を。物。か。の。天。を。瞻。り。送。る。目。の。柱。小。身。を。倚。せ。く。立。坐。せ
 とも。松。吹。く。風。の。便。り。ま。ら。只。一。遍。も。皆。え。び。果。の。怨。も。ら。敷。く。身
 ひ。の。秋。も。ら。捨。て。死。扇。あり。此。は。是。の。比。瀬。十。郎。が。曹。の。別。々
 送。れ。且。その。扇。小。一。首。の。歌。あり。と。徒。然。さ。折。の。筆。を。ひ。と。と。替
 たく。夕。立。の。お。れ。間。く。ま。昔。む。く。い。る。板。橋。も。秋。風。真。房。と。を。考。へ。る。
 草。書。の。美。人。柄。を。え。く。と。愛。く。阿夏の。歌。も。ま。も。左。さ。右。さ。思

惟るふもろくも彼人のあひ初一日の夕立の避雨の折るる歌のあはるも自
 然と稱へ加梅下の句は乾くぬ笠簷よのまといれば只一回の縁するらんや後か
 あふ瀬のあまみまへ一さびとも心まのさへ。石死のせの四言えはれが古歌ゆも夏果ある
 扇と秋のまゝ露とつれり先ふちぬゆの床とまん野上の班女がよきる残謡
 曲中も載られまへ静心る死が身まらばゆと今の歌を榮小郎のあはる秋
 風のもも立といふ非飲それうあはる飲まらる安らるぬ宵月の有也無也の関さう
 ちまらちあはて夏を中せのるるのうら。紀念の扇の身とも放さむ人あ折あ
 こり出らち披た膝の措てそら吟下り又はる果一るげ死を慰めけり不題木
 偶次が母屋のあはるの京よ名々依庵丁戸もて家号と池澄名と龜六と吸
 れるそら獨見の鯽九郎の今茲二十五歳はなるぬ色黒く肥脂満たれはと死
 男あはらねども色好まの癖るれば早晩阿夏小あはる惑ひて思ひとよき情を

運ぶ阿夏の腌臢くもども有較小母屋の息子されば強願くは答をぬ
 せむ只成る如く成らぬが如く遍る外とて月を過せし秋より老る去歳ま
 似及阿夏が生活間あり朝の煙の知る身を鯽九郎のよく知て米を贈り薪を
 遣一月毎の餽賃も取らぬと親あ告ぐいと憑くものせし俗あは
 垂る神あは又祐ける神る一月の夜の食も妻の親子爐小よる冬構さの
 と送りけんとらる阿夏はゆも恋慕ひぬ瀬十郎からるの忘れらるるあはる
 ども物走しと鯽九郎引る袖を拂難く靡けはるあはれ初のでころちも歎
 らるるあはれ案下某生再説陶瀬十郎の君父の為小身を慎ま阿夏小
 音耗とせざりしより寒く暑くも代謝りく十月の上流るるあはれ程小
 一日野西野頭卿より消息を贈り多りしと受戴を披見る小嗟峨る
 予が山莊の丹楓八は流るるの色既濃小過るる霞雨あはる搗散へし

緑の東
木
異の辰
巴之風
入録
皇木
楓
偏南

のて翌足下と共に百首題をよまんと欲す未後より彼処へ來會せよ上
 客の萬里小路賢房卿以下兩之友の過むるの京兆は詰りて障りあり
 なるものなり。怠慢遲滞するんことを惟祈ると書せり。瀨十郎は乃
 者勤仕を暇るて久く彼卿を訪ひなむる心苦しく折ぬ。佳會を招せり
 りて猶豫せんやと。要時宿所の使を使して主の義貞よと告げ免許を
 得て報翰をまゐらせり。却説陶瀨十郎の次の日嵯峨の兼頭卿の山荘に赴
 けし。あつたの君の先をて。あふ來りて候ひ。召入れて對面をた。別
 後の情を述る程に賢房卿も訪來りて。圓居に入り。餘兩三
 箇の殿上人の障りと。來ぬ。坐す。これ。辭敵の客あり。這人。是。足。む
 とく。兼頭卿の先の立て。假山の。る。録。異。亭。誘。引。の。別。荘。の。心
 仁の。兵。變。を。脱。れる。現。塵。外。の。良。園。之。宗。と。裁。られ。る。丹。楓。葉。の。曲。演。は。落。葉。

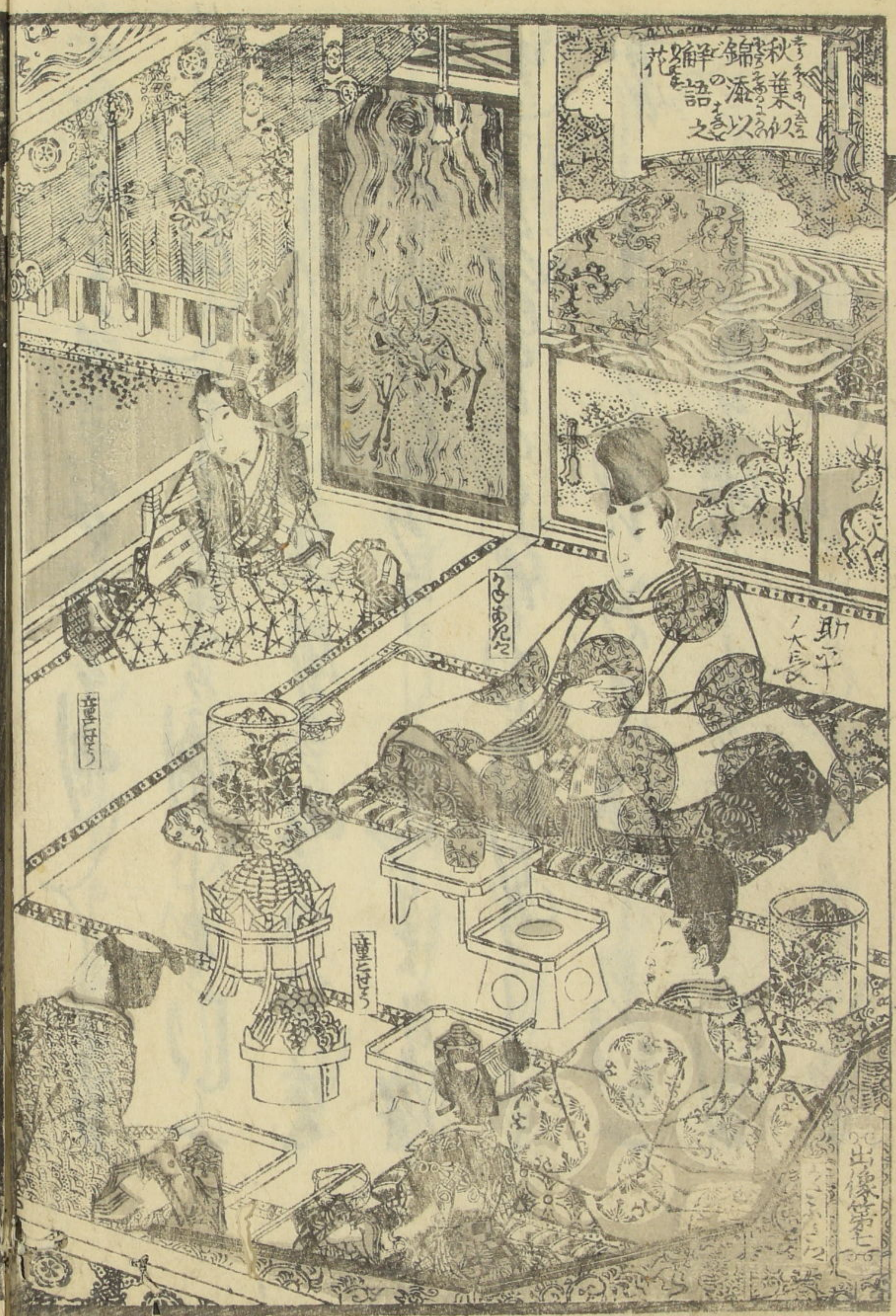
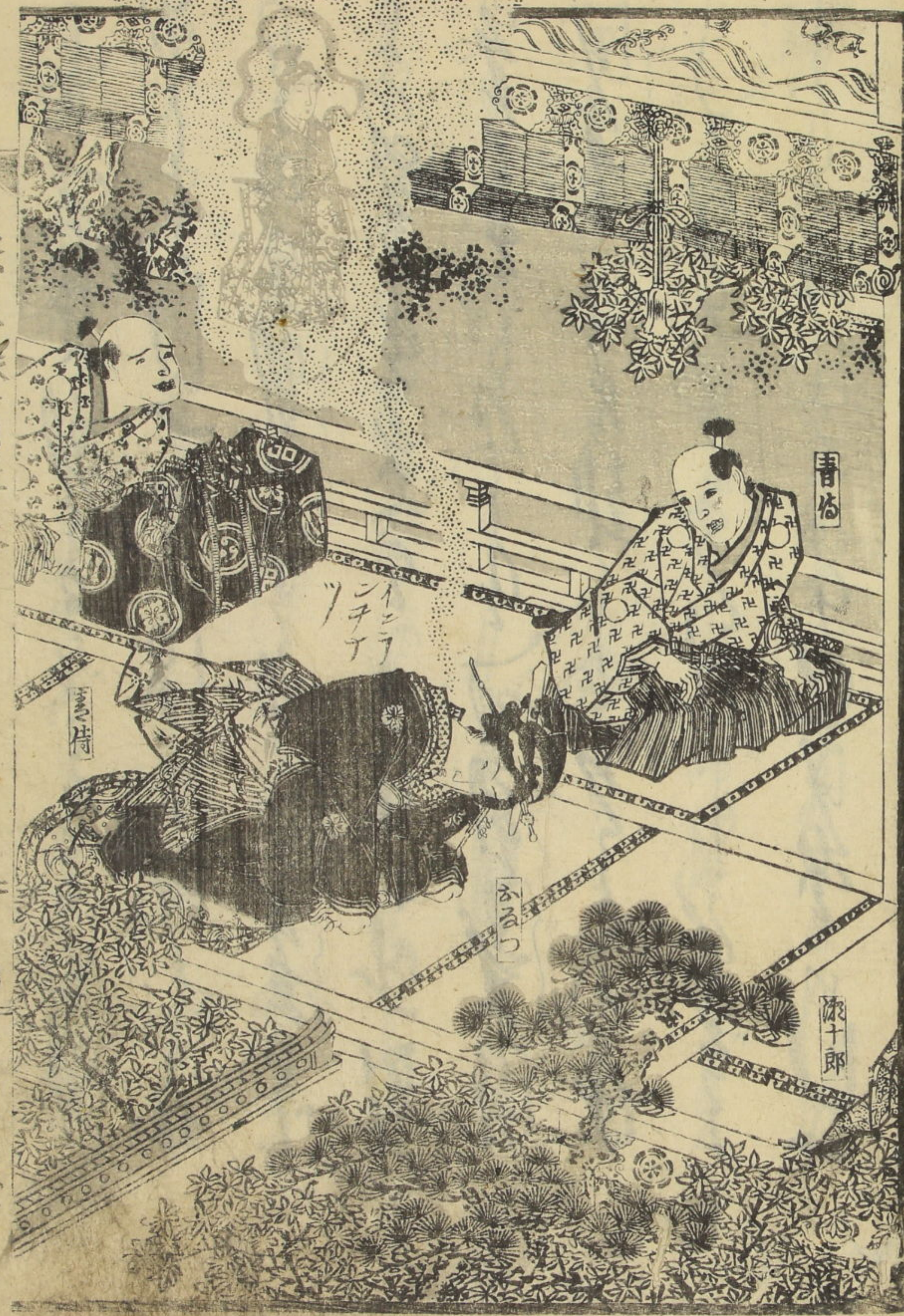
彼の龍田の川も外らむ。む。京極。黃門。の。小倉山。の。山。荘。も。あり
 けんと思ふ可。北。窓。以後。て。狹。狹。鹿。の。鳥。声。遠。く。傳。え。けり。亭。の。四。間。と。三。間。を
 二房。小。分。り。て。方。爐。あり。坐。右。の。料。帝。硯。と。此。の。調。度。を。置。れ。の。あ。の。の。檢
 素。亦。愛。り。有。右。而。實。主。の。坐。定。り。く。晤。譚。の。間。々。小。瀨。十。郎。の。彼。此。と。頭。を
 回。り。樹。々。の。梢。を。瞻。仰。す。真。紅。の。薄。紅。の。黃。の。黃。黒。の。あり。そ。中。の
 青。葱。と。緑。の。常。葉。樹。は。れ。彼。甘。谷。は。瀑。と。の。蜀。錦。を。被。る。ふ。あ。ら。は。の
 便。是。蓬。萊。五。色。の。雲。と。疑。ふ。秋。色。の。目。小。美。く。秋。情。を。用。る。然。程。小
 給。仕。配。饌。の。童。扈。後。亦。割。龍。土。器。を。て。席。上。小。安。排。へ。り。登。時。兼
 頭。卿。の。合。笑。る。が。賢。房。卿。も。う。ち。對。ひ。け。の。圓。坐。の。ヨ。ク。沁。ぐ。瀨。十。郎。も。皆
 以。豫。て。百。首。の。題。を。う。ち。て。歌。を。ま。ま。と。思。ひ。の。昔。定。家。卿。の。小。倉。山。山。荘。に
 押。れ。る。色。紙。の。皆。是。古。歌。ゆ。と。自。己。の。歌。の。一。首。を。然。を。輕。才。薄。學。を。

吾侪が分際を幾百首よめごとく人小首する歌の流るるのれが只清談と不交巡
 らまてと真の保親とよべられ席上尊卑をどうしてとて官と語を米銭を談
 せむ或の歴世名人の得失或の江湖風流の舊説新聞才小任しく共ふ
 醉と盡まてこの受のつと同の賢房卿も瀬十郎も素より望む所を
 誰う亦異議はなれど答はるる有此而酒醺たまるとて盃をく巡る
 程小兼頭卿又宣ひ酒あつとよむ佳肴有るは東道まきの罪する其
 既小の罪をぬりよられ佳散るゝとよむ佳入ありと酌と兼り且歌曲のく其を
 添ふ罪免さるゝとよむ誰う折をよけれ彼のの口とらそがく多き道
 習の侍をろをぬく兼りつと心なり且くといと艶妖る一箇の女子の風俗淫世
 めたるが件の近習の後小跟て外面より来る程小又小阿容る氣色もさく
 引と隨小縁頼のうち登り頼とさく上つとさあいなまもくおん恙さくまは

まのいことおれうそといふ安癖の愛敬づるさそとよむと問も返くらち仰
 がぐ在りける兼頭卿をへりく喃賢房卿渠の名を白柏子と槐月
 貴女の公子ゆを招れてまあり折某もその席上く聊相識るとぬこれ
 君ゆも知られると自今も賄話さるゝ酒あつと佳肴有る罪を贖小料まよ
 り召と召をいふをを蒙りて近くはらまてうのやと真実とて問の賢房卿の
 つとをたつと亮然とち笑く宴小渠の或くといと某も相識まの妙音ゆく
 妙なる何のうよく渠は優れを音待の町寧る佳肴有るといふと然と
 添ふ小ゆくのどれ佳人をとてあると意外小出さる幸ひとや女子進めりと招
 せむと辞ひるる白柏子又頼つとく命らちとせむのいと僅小膝を進めつ瀬
 十郎が背のうま坐るをえたる瀬十郎とよむと面をあらと送小款と数馬
 まて心慌て陶酔小款阿夏る款とまろ小背向まると口隠る顔ののみちも

庭面る樹々よりの色増りけり今この男女の爲体情由ありけりと措く事
兼頼卿の賢房卿も呵々とうち笑ひぬ瀨十郎の四月の比より在京と云れ
とこのころの疎るごとくと思ふも夏を知りたる由のあらぬ漢もを調戲
の瀨十郎も阿夏も俱小困り果てこの席上は冗あらずとほいけり下
兼頼卿の賢房卿も瀨十郎さのさきより御向も既よりひけりこの席上の尊
卑の礼を浮世の遠死山柱るれが歌并艶曲を聴す欲す俺們の心憚り
ありたされけり初め色も罰盃の脱る路のあらん二つ三つと傾
けて夏小なれと浮る賢房卿も笑坪まへて宣趣定ま介り此彼共介
介意せむやうち鮮く酒を喫むべやと薦めぬ瀨十郎の辞まるより
なく盃を受二度傾けく馳く阿夏もさしけり是より席上乱酔してその兵衛
るければ主客執ひて盡す折らう近習の侍縁頼のほより小來て兼頼卿介

稟を今目白殿下御房より御館へ使を進せられ猛小御對面欲
し多早の御來臨を俟せぬと云ふ是れを留守の共より宅書と稟
來りたる相計かやと報る兼頼卿眉を蹙りて忽ち去る見直
殿下は参上と云ふ美及とせりくはえの賢房卿うち寄て某の
比殿下の問せぬより少し考索しこれをも報るらう過たれは
亦某も共侶もあらず一月の叢雲花の風可惜佳會を果はる盛に
虧くの美を然らぬと潜めく相譚をうち領を和君のけを殿
下より召せぬと云ふ某と某の友とを豫て殿下の老をの
と語次不傳は後不便るものやあらぬれが強くこの処小留と云ふ
いふと同様の美の意を任せん先を準備と云ふと云ふ又瀨十郎
うち對ひて極小障りのいと来りて目今喧れず如一日の暮存れ燭と兼る



新編源氏物語卷之三

出像第七

至る。後下下下下下下。細骨敷と播まき。夏が本事の辭と観る。
 と思ふ。と云ふ。せん。と云ふ。外面。と云ふ。仰ぐ。短景既。傾。盡。と下。晡。ふ。なり。
 たれ。とも。轎子。と。飛。し。と。彼。処。に。赴。た。又。轎子。と。飛。し。と。歸。路。と。急。ぐ。遅。く。も。甲。唐。
 程。初。更。前。後。の。歸。來。の。下。の。又。夜。と。共。に。遊。び。曉。さ。る。樂。し。む。る。夏。共。侶。の。
 俟。す。可。し。正。首。示。し。の。瀬。十。郎。の。言。の。由。を。仰。ぎ。ゆ。め。も。夏。処。に。彼。処。に。近。く。も。り。
 を。殿。下。の。見。参。考。考。あ。く。御。長。談。亦。及。り。せ。ぬ。ゆ。め。の。來。ま。さ。ま。思。召。は。とも。夏。
 園。と。と。ら。の。を。ま。て。と。ま。べ。れ。願。ふ。亦。某。も。身。の。暇。と。る。る。今。宵。限。り。と。
 久。と。固。辞。を。兼。頭。御。推。返。し。と。これ。の。遠。慮。の。過。る。元。の。頃。の。夜。の。長。く。は。彼。
 處。で。時。を。想。を。とも。又。り。來。ん。の。易。か。く。は。下。の。天。明。く。も。京。兆。も。と。も。と。
 つか。方。は。來。れ。れ。か。さ。る。外。口。の。あ。く。も。あ。く。夏。も。如。右。と。あ。く。後。者。あ。く。も。俟。ま。
 ば。要。る。と。それ。ら。返。し。と。翌。の。朝。迎。へ。ま。來。ると。い。ふ。を。よ。け。れ。枉。く。の。誤。後。に。

よと。論。せ。り。く。論。の。賢。房。卿。由。共。侶。の。あ。く。の。君。の。か。ま。不。宣。の。り。の。り。
 せん。不。樂。の。り。と。も。要。時。の。程。之。夏。の。ゆ。め。の。あ。く。ね。や。急。ぐ。と。期。を。推。し。と。仰。ぎ。
 の。瀬。十。郎。の。ゆ。め。の。固。辞。は。よ。り。と。て。御。意。の。後。ひ。ま。う。んと。心。く。を。俣。の。け。り。
 然。程。は。兼。頭。買。房。の。兩。卿。の。猛。小。後。者。と。促。し。て。急。に。関。白。家。事。あり。ゆ。め。
 給。事。に。侍。り。青。侍。中。の。各。主。の。伴。の。あ。く。の。僅。小。一。兩。箇。の。男。方。童。を。送。さ。れ。
 た。の。の。餘。の。年。來。耳。原。の。住。の。園。吏。支。婦。あ。る。の。も。忽。地。人。影。を。か。り。の。り。
 垂。暮。と。さ。る。程。の。阿。夏。が。衣。裳。を。推。し。と。俱。し。と。來。る。木。偶。の。園。吏。の。宿。所。の。
 を。り。縁。由。の。後。ゆ。め。の。と。の。阿。夏。の。翌。日。の。ゆ。め。の。あ。く。の。ま。け。れ。獨。宿。宿。所。の。宿。所。
 さ。た。の。小。夏。の。の。心。の。ゆ。め。の。翌。の。朝。出。る。ゆ。め。の。迎。の。來。め。と。の。以。措。く。と。三。條。ゆ。め。
 還。の。け。の。ゆ。め。の。程。の。冬。の。日。を。夜。没。果。の。童。扈。後。の。彼。此。と。坐。席。の。燈。燭。を。
 點。し。と。且。く。あ。く。ま。は。り。と。寂。寥。と。な。る。堪。ざ。り。けん。園。吏。の。宿。所。は。退。り。て。

余後の生々来を四下小人のさぐりて。阿夏のまを背より郎の袂と抜動して。
 喃瀬十郎ぬ薄情ぬも程とあるあ雲ゆも山とるる月の野路の御堂小笠若
 かり利生の千手の汲引せ其処初とあひ合傘の濡とく嬉し夜雨辛
 崎るる三條小渡せ橋の長れと短夜明と起別れ後のあ瀬と身ひとる
 まつくりとありの来ぬ君由まをそつ胸の左小右く須麻のうらやえ理願ひ
 樹向の恐惶に神ぬも仏ぬも祈竭とこの傾い病を生平る身の瘦せかん才の
 め目ぬちまぐんええや宿所の豫く知てまら音耗を管領の御館とあぞ憚の
 関小虚音のちざり八声の鶏とひより寝く寤寐不楽くくれいれ幾夜時と
 ちるるゆび相見るとるる首尾と夜間の人影とあぞ怒とあぞもあふん
 何日と岩間の送水今も忘れぬあともあての後も強顔死心つと声立てはつ
 口説つ堪るる胸前合く引よまら白く弱に巻のうふたむる雨の涙と瀬十

郎の理りと思ひるるもやなむ引放ちる嗟嘆小堪む衣領揃合とる阿夏人
 木石のあらわれこれともいぬる夜の假寐の夢を忘れぬ一日も胸は絶むあを故
 意音耗をせりしあえ身あら木偶ぬといふ良人あり子もあるとこれ人信もあけ
 る。よりや浮う技とて浮世を渡る弱女もともぬあを猶密あある君父あも
 世人も何をてこの身の越度をいといよのあえ死まとも汚名を雪めぬ恨あ
 と心つてぬびあひんを欲せぬれくうう牙を戒めく遠離して今も情を
 あら似れどもあん才の為とる実情只一宵の縁とあひ諦めあ恨も
 あらうつたあやや喃と背捻りと寛解れども阿夏の髪を頭と掉りと理め
 あく云云といひつたを三あえも男とみぬの情のあゆを忘れて共侶小命と捨る
 者も況んや木偶ぬの良人かして良人子信も実をあせ小夏といふ女児とあ
 つ宿の寓居人て信るう。われを月比日らま女細糸竹の技りて養ひ侍りあ

とも昔思ふ報るる有如之者おん身と情由ありと彼人なき知れぬ女
 何とも思ひ候ふま然るらんや。まうえや。おん身のうま一稔も事あるらんわらばり。
 これらのよきよきものゆゑあらぬ人語をのミ真の信て妾を疎まぬひらいと浅きをにゆる
 り。さるものくも過世より結び縁一るれがて果敢る別れ後朝も送れ扇へん
 身の手迹おん身の歌を像見ぞとるる愛を深雪ゆめあは放き及冬の日の今宵
 あまの歌占ひ現憑し紅のあわん偽りさるる證ゆこれぞ疑ひ散してとと披ひ
 示すの良房と正しく識せし自筆の味歌昔のまら地ふしと欲し筆は科を
 夕立のそれ間くお苔むしとひらぬ檐あか秋風現ゆらむありけるよとゆるるひ散馬く
 瀬十郎とる恨一はまうち向すお初日夕立の雨の宵回ありぬとも涙の雨を
 小歌る。乾ぬ袖の苔甚蒸ままふ心とぬを汲まぬおん身は春くお死風とる果て
 づ強面くお楽くもあらぬ世の間お存命てゆめせんよとる絶一柴舟のあられく

死より今面のお身を時たぐ赤心とるまはあらせん南無阿彌陀佛と唱へる果は
 傷ありし瀬十郎が力をとる引よきと抜放さんとする程の吐嗟と騒ぐ瀬十
 郎の抱か禁めくや。阿夏短慮するまらる彼木偶の寓居人達。おん身は真の
 良人らまらるる罪軽くするゆに飲れと。され武弁の家お生れく周防の二親も
 京師の主君とるまらるる。この身の謹慎疎まぬ忠孝兩兼るその方缺て戲
 けたらぬこのれんの。有斯者の今日の早るるとも決ふあらる。變らぬ久後あの一く
 有る。ゆきを古歌ゆ。年毎あふとるまらる牽牛織女のぬる夜の敷をまらる
 けは今宵の下思の天乃河又來る秋と契らんと。疎むとるあひひとと慰められ
 捨の月の夜許呂と表裡も阿夏の怨稍解け。然るあはとん中ら。よや
 あ夜の稀りとも。まら京師の月と花北山の雪阿原の避暑暑者。寒の折
 々おそよこの風の音信と田面の雁の翅も便宮とるひとと繰返たる草環のより

添易の牽牛花も一盛多諸蔓迷ひ花をけ。却説這男女入の會
 話の時程りと人定のを過これども尊頭卿も賢房卿も再々め來ぬ彼男
 童小の退り依ふ其処の假寐やあけけん園吏のその職をねこの亭上より出で
 來て瀬十郎阿夏も誘慰をもめて深ゆ夜間の膚寒ければ阿夏の瀬十
 郎を誘ひ立々次房も退くよあゆのと大なる萃檀之四枚措れり推ひを
 二れをなほその羅紗の中優う是を今宵の衾ふとく馳く布寝は假
 枕をさして夢を結ぶる。現男女兩室の相會て遂め惑ひるらん柳下惠
 るるものいさざん所行され瀬十郎の月來の謹慎忽地空とると雲起
 雨降とて楚臺の快樂の餘念る後の患を省るる道もあはれ世の常言
 の焦材の程り易火と木の相生相怒く恰も是深のどく膠も似る。既
 既ふと瀬十郎の寝るともあまを熟睡しく丑る比ひを覺て起る廁小赴ける

紙窓の格隔子の間小晃々と光る物あり紙燭を抗つてくるは真白に小
 蛇をありける瀬十郎の幼稚たるよその性蛇を嫌ふとてあはれと驚怖
 れる走ると臥簞よりのあつたそれいと美少年の齡の二八可る阿夏と枕を
 並ぐ臥する。あつたのと覺はれ復ち驚訝する。暗を定め再び少年の
 搔滅を如く忽地耗たなりけり怪しむるものあまをの感ひの心を
 思ひ捨て阿夏を異ねるものあまを快けの熟睡とて身を推塞く
 側よりて臥せるとまゝ。何ゆあつたまゝと太くゆめ物あり心もあまを
 怪しむと又よく見るものと大なる蛇の阿夏を背を巻締り頭を擡け舌を吐く
 胸下と誰と。瀬十郎の光景を委時ゆ堪む吐嗟とむ。一声叫苦む隨
 仰反倒れ息絶けり阿夏の今瀬十郎が叫び声と倒る音の駭覺て身起り
 され瀬十郎の轉輾びる面色恰土のどを巻を握り齒を切て氣息既絶

これとおん身とあふ在りて夜を明しき備難遂に脱れりて。そと浮名の
 立とあらん今曉る程も。これの急ぎて御館へつくと。おん身は迎の人を
 俟て翌の朝より久し。猶人問ひ瀨十郎の甲夜の問ひありと答て疑ひを避
 ん不足緊要の便直るれ。あつた人と耳に示して身装う遠く若狭を
 披留る阿夏の要時と推居る。宣ふよりの答えくゆれど。取りあはるる速り
 彼処にお免著るも。御館の門戸開き立こびく。おん身は送り
 むる。御館より急ぎぬいと惜む餘波は。これの思ひは躊躇ひ。
 瀨十郎の八声の鶏の鳴く。おん身は復身と起しと告別り。庭面より樹の間遠
 して。おん身は木戸ありて出でぬ。阿夏の肩も縁頼み立曉。さき目送り
 表話不題兼頭卿の賢房卿と共侶。おん身は只管轎子と急し。関白殿下
 まりぬ。途ゆく日の暮る。扱まりぬ。おん身は殿下御對面して御示

談數刻の及び。うまの風めて参内。おん身は公教を仰合され。更ふ別荘
 赴はる。おん身は賢房卿より。おん身は彼処におくとも。要る。と辭別
 して。宿所へ歸りぬ。然れば。おん身は時移りて兼頭卿の子二刻の左側
 におく。帰館する。おん身は猶も彼事の時移りて。瀨十郎に告遣りぬ。
 追あはる。天の明る。おん身は比は一箇の近習。おん身は奴隷を俱さして。嵯峨を別荘遣り
 ぬ。瀨十郎の云云と。緯の趣を。おん身は告知よ。夏虫の形の如く。祿物を取。て還る。
 と分付。おん身は近習の侍あり。おん身は果て。おん身は嵯峨。おん身は程。おん身は天の明る。
 有。此而件。侍。おん身は別荘。おん身は瀨十郎を。おん身は緑。おん身は亭。おん身は阿夏。おん身は
 瀨十郎の。おん身は昨夜の。おん身は問。おん身は退。おん身はり。おん身はと。おん身は皆。おん身は且。おん身は阿夏。おん身はよ。おん身はと。おん身は告。おん身はて。おん身は祿物。おん身は取
 ら。おん身は直。おん身は管。おん身は領。おん身はの。おん身は邸。おん身は小。おん身は到。おん身はり。おん身はと。おん身は瀨。おん身は十。おん身は郎。おん身は小。おん身は對。おん身は面。おん身はと。おん身は主。おん身は命。おん身はを。おん身は述。おん身は傳。おん身はへ。おん身は再。おん身は別。おん身は社。おん身は小
 立。おん身はと。おん身は盃。おん身は割。おん身は籠。おん身はと。おん身はり。おん身はと。おん身は斂。おん身はめ。おん身は昨。おん身は夕。おん身はと。おん身は送。おん身はさ。おん身はる。おん身は童。おん身は扈。おん身は侍。おん身はと。おん身は相。おん身は伴。おん身はて。おん身は西。おん身はの

館を還りける。是より先、笠屋阿夏の誥朝木偶が迎ふるを俟
 つけ、三條の宿所より一より更み、又瀬十郎をよみ、初は優しく去のびくふ
 玉梓の使どりと安否を問せ、東西を贈るもあらず、瀬十郎は固く禁め、
 これより後、月毎に薪炊の價を次買し、阿夏の生活は暇ありとも、衣裳は
 喪ふ迄、小至をも左も右も去て、浮世を渡る月雪花の折と、瀬十郎は去
 くるを俟つべしとの思ひなり、今も阿夏は縁異亭を瀬十郎と再會せしもの
 比より有身と、妊娠十三ヶ月及び、明年の冬十月の初つゝ、男児を産
 け、この夜の異風吹暴れて砂を飛、尾を落、も真夜中比の屋棟、煩鳴、
 泉鳴の声、夢えのほれ、この時の方りと阿夏は産の紐を解たり、不祥大く、
 されども母も子も恙なく、日比、隨肥、まけ、まれば木偶、今阿夏は懐胎の
 人、まけ、ま、十三ヶ月及び、心おわらざる、一條反橋の邊、賣ト

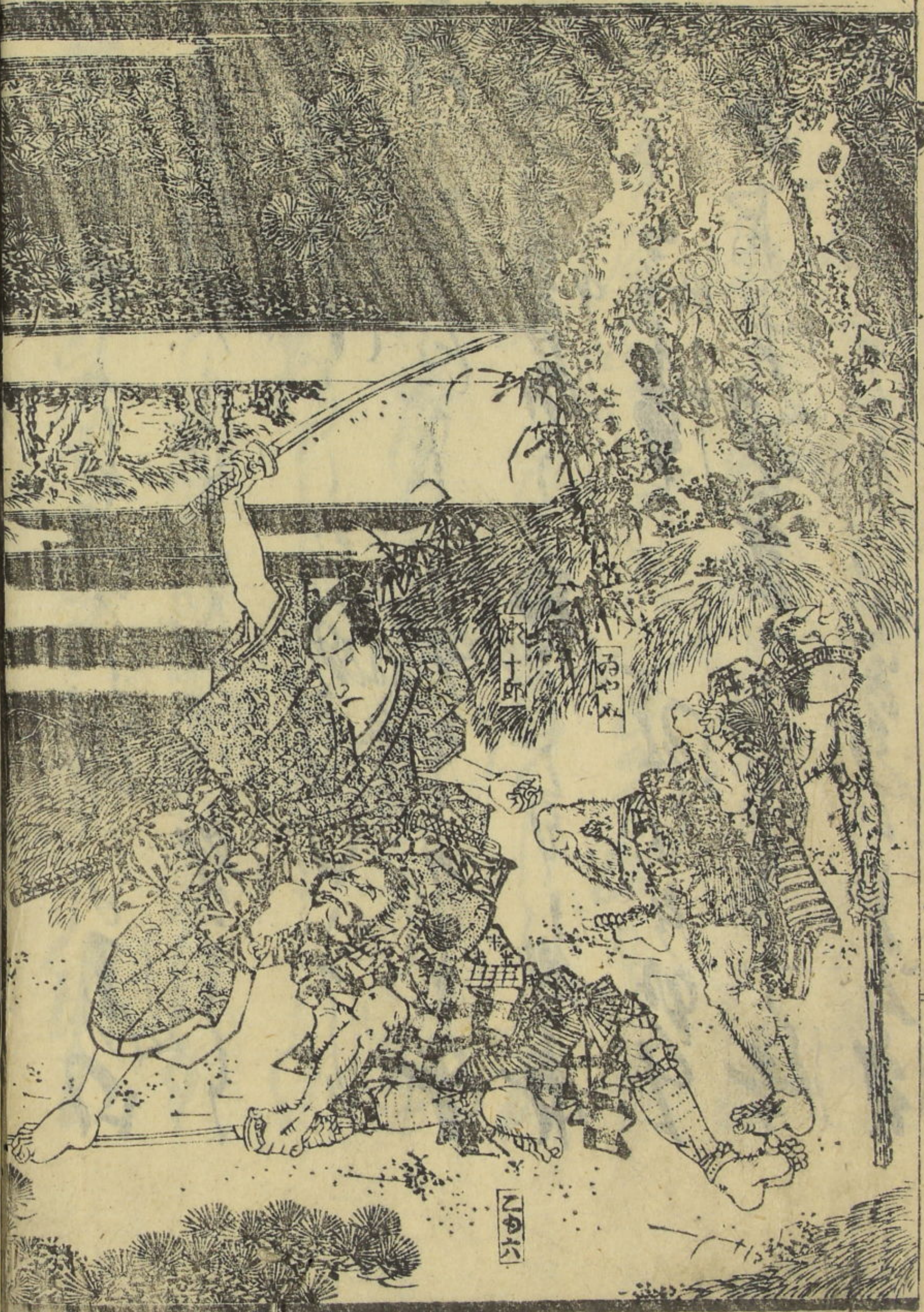
者、百中の妙ありと、皆て右、一日彼処に赴たて、その子の名、本命終始の吉
 凶を問ける、賣ト、公翁、いとゆて、昔と合ひ、卦を布て、乘時考て、ひと、点頭
 硯を引、各筆を添て、子而非子、非親、是親、一窮一達、因果、輪々と書、写
 まで、これを木偶、授け、このやう、天機の切、漏ま、る、この四句、記憶
 其後、小思ひ合、まる、あらん、秘よ、人、知る、と、いふ、木偶、今、
 撥、左見、右を、と、恥、言、僕、の、文、盲、れ、一、句、も、読、か、願、
 解、と、い、ね、と、い、賣ト、公翁、と、掉、否、今、讀、で、皆、と、も、目、今、知、
 り、の、あ、と、持、と、強、画、谷、へ、と、あ、の、木、偶、の、疑、ひ、
 宿所、の、又、と、云、と、阿夏、不、報、で、賣ト、公翁、の、書、と、又、
 今、と、知、れ、ぬ、る、ふ、人、の、問、と、も、の、甲斐、る、と、い、
 今、と、知、れ、ぬ、る、ふ、人、の、問、と、も、の、甲斐、る、と、い、

答て鮎く嬰児の護身囊小飲りけり然程は阿夏が子の五十月百日を
 歴る隨小全身をなしく美く肌膚潔白く珠玉の如く容止又母小肖
 れ亦いへうもあざざりけり木偶の愚魚目もつが滑るるをどしどし
 限りもあつたるあづの女の子の内産するをどしどし吐きてその子を珠之次と名づけ
 けり却説阿夏の瀬十郎許安産の如く如此くると竊小人とりと報知し生
 れ赤子のあん身小肖て目上は黒子ありあんの黒子と一對るれが親する
 疑ひる悦せ多くと筆小いと誇りまれば瀬十郎の疑ふて実事とのあつた
 ともども為小錢鈔を贈り衣裳を遣しをせしを木偶の愚魚目と名づけ
 夏と見小肩の財主の取のものとせ給ひけり然程は光陰並明のどく松のどく藤来
 たり雁之之拾の春秋と麻糸けれど珠之次のあつたてのあつたてのあつたてのあつた
 離人形も優しうと親のあつた他人も愛せざるものあつたけりかゝり阿夏の子は

西鶴されて男の隨小生活よするをどしどし瀬十郎が次男あれ然と餓も
 凍もせむ既小と珠之次の稍懐と離れり又生活よするを初小あつたてのあつた
 不題末松木偶が母屋のあつた池澄屋龜六が獨子なり一軒九郎は裏の阿
 夏小眷想と錢鈔多く費せし阿夏の年の十月陶瀬十郎と再會
 せし根柢小優る杪材きれば敢又軒九郎をえりたれども強面ものせ
 し一軒九郎の瀬十郎と情由あるを知らねども阿夏が官小けられて
 空官と遣ひる果の野の枯尾花靡くともあつたてのあつたてのあつた
 どの木偶といふ良人ありあつたてのあつたてのあつたてのあつた
 とど程小軒九郎が放蕩する只この一事のまゝ賭錢と好みて洛外るる
 破落戸を友としの或は花街のひし親の仕財を竊出せしその事の非
 覺れる折ら筋多に借財の債彼此より起す来て親の難義小及び

亀六懸死且怒りと卿九郎と追出。遂に京師の住い免さむ。この故に卿九郎の阿夏の恨を舒す小よき。和泉の佐良小赴たて或は死の料理の技も人の為は傭ま又或は死の酒の夜取ると。辛くその日を送る程に既ゆに四稔と歴つ。この時又京師の卿九郎が父池澄屋龜六の齡六十にまう。一六京師の技もあふ小任せむ身ま心の衰へ。悪棍も親子の恩愛折ふ觸る。卿九郎をうつくぬ氣色の言の葉末小顯れを。四隣の市人さそと猜と商量あり。親子のぬ小我遍とる。勸解に龜六やうなげ引く。卿九郎を召返し小る。然程に卿九郎の親の勘當と申す。れて京師を歸著死より且く身と慎めて漫行もせあり。吃下過く執事と忘ると。世の常言小漏るるとる。遂に又舊病起りと相識る。破落戸ホと交る程に阿夏の四稔前つ比より陶瀬十郎と情由あるを。よく知

るものあり。卿九郎と恨せんとも渠が産る珠之小の瀬十郎が子るより誰と知るぬれ。やれど向火焼く説示せ。卿九郎の大き怒りと原来の比阿夏奴寐うり。打て強面ゆ。一の向夫あり。所以に。先づ陶奴の結果に介後阿夏と殺ま。と必ひ決める。瀬十郎を粗般を。と欲まれぬ。その面と認め。その由も菅領家の雜色奴隷小縁と計め。酒を飲。東西を贈り。遂にそのがらと交る。のひり。外るが陶瀬十郎と認るとさ。ゆりけり。是より瀬十郎が微行と考る日。途ゆく。敷も。と尋思を。ゆり。敵多を武士する。微行の折る。とも一兩箇の後者。あらん。然る。ゆり。身ひ。とも。ゆり。小考。捷を攬る。死友垣結び。甲乙の皆。是。微力の博徒。る。ゆり。時の援。ゆり。たの。ゆり。鳥部野。ゆり。乞兒。ホ。ゆり。心。悍。力。あり。ゆり。武藝。相。撲。小。長。ゆり。た。ゆり。落。龜。ゆり。も。あり。ゆり。と。ゆり。彼。ホ。小。錢。を。拵。せ。慾。ゆり。誘。引。て。相。譚。ゆり。幾。人。ゆり。



十郎

ノ



ノ

五

出像第八
せん本の
千本之
瀬十郎
銅九郎
戦

易のそ一縦彼ホ一兩箇返敷にや原とそも原是乞正のるれ。所
 為とら知るのるん是は優心術のあらと心ひとら小以ひ定め有一日
 鳥部野は赴けり。あ小弓の乞見の中筋骨の逞げる。面魂の一癖あ
 らんとあを。西人樹蔭は招けり。鐔の機密を耳示し懐小あるる。圓
 金四枚をさし出と四箇の乞見小取をせり。抑這乞見ホの相避菟六鬼
 唇卒八頼の猪弥次犬蒲團部太郎と喚れり。剛慾を慙の癖者
 るれ一謀及び兼引。悪事を謀し合せり。既向く鯉九郎と四箇の躬
 方とゆれども陶瀬十郎が微行と何日と定ふ知り。存れが又管領家の
 諫小因て件のよと搜り。瀬十郎のなきより天満宮を信し。まの量表小
 京師小来り。比より必月の二十五日は北野の神社へ詣る。雨の日風の朝とよも
 懈る。とせえり。そと究竟と歎ひ。又乞馬ホは報知し。鉄でい克くと

潜り。兵器五口準備ら。乞馬ホよその四口を授け。千本條路に伏し。と
 陶が北野よりくる。を撃果え。と相譚ふ。乞馬ホも亦歎ひ。その日と遅と
 俟ける。然程に陶瀬十郎與房の身仇あ。を知り。て本月二十五日北
 野へ詣んと欲する。その日の勤仕は暇きて。時を待後れ。然と己が
 あふ。れが事果てより。遠く後者佐次折女。お北野の神社へ詣り。要
 時神前。黙禱し。と下向。路を急ぐ。とされ。千本本町を過ると。た。名。黄。昏。は
 る。あ。け。折。ら。あ。り。理。伏。き。鯉。九。郎。の。樹。蔭。に。候。て。陶。が。迹。より。跟。て。来。り。
 乞見ホの道中。横り。列臥して。竊も。て。渡り。瀬十郎の心。そ。夕
 間。暮。の。の。め。あ。れ。臥。る。乞見。よ。も。え。と。磯。と。跌。死。け。と。先。多。部。太。を
 踪。躡。り。部。太。の。忽。地。苦。と。叫。ぶ。暗。号。小。衆。皆。身。を。起。し。瀬。十。郎。を。後。を
 遮。り。勇。の。抗。蒐。と。諸。声。高。く。眼。を。瞪。ら。し。這。阿。侍。の。目。由。首。有。れ。ぬ。達

十六

てめ目子と詰りて措く。過世りてこの世に果ては俺們でも親も踏及五尺の
 軀を蹂躪られん堪うものぞ。さうも鄙太の膝骨を踏折られん腰を立に敷
 計の寛家造ると。何処へ逃を覚期せよ。聞諍の掛置憎しと憂願十
 郎の柳の流しと此の驛を馬のつらち對ひてのりよしのを理るゝねと前路定ふ
 らるゝ。黄昏時小次郎を急げあらぬ人ありと。是さるる徳とされ又价
 求ふ似たり。心りとも避れと踏掛るゝ。疎忽大人氣も多し。幸ふ佐三次銭を取
 せよ。この若黨佐三次といふ朽をくも俗よを見お棒較めと。さういふ折れと見
 注し心と推しける秋包を立るゝ。解ひて銭一箱を出り。畢竟を見
 銭を受く。願十郎と放りて。且み見し。出像を現る大々を知りぬ。

近世説美少年録第一輯卷之三終



